LUZの熊野古道案内

2008年　4月　上2

4月7日　～　11日

目次

２００８年　４月

４月　６日　熊野市立神川小学校
４月　７日　熊野市立神上中学校（神川）
４月　８日　熊野市立青柳分校
４月　９日　寄り道　田本研造　生家
４月１０日　神川特産　那智黒石
４月１１日　月例　熊野市報４月号より
４月１２日　電源道路　国道169号線
４月１３日　熊野市立五郷小学校

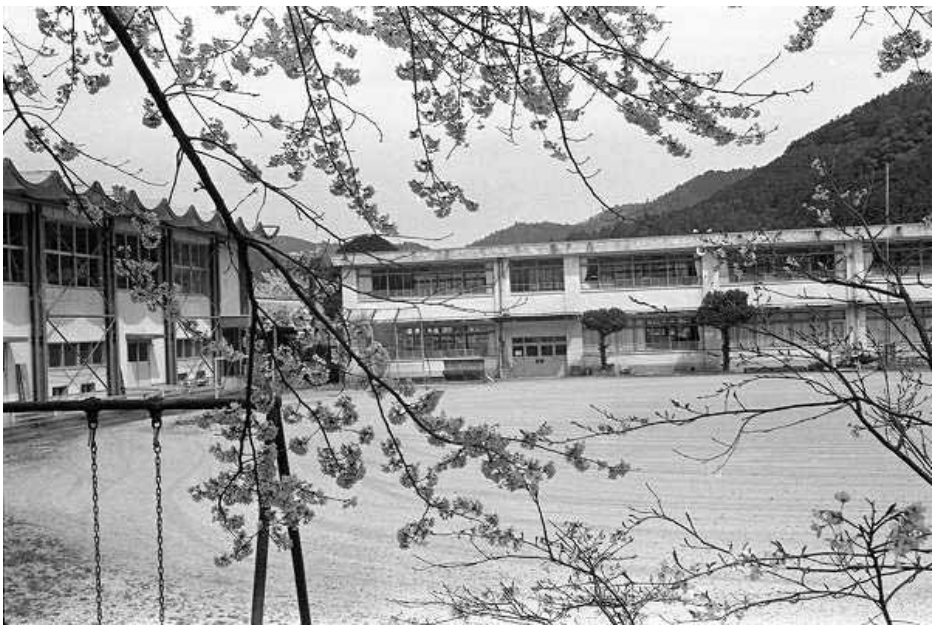
2008年　04月　06日

熊野の旅　熊野市立神川小学校

さくら祭の行われる神川町にある、小学校です。

さくら祭のメイン会場は、七色ダムの工事に伴って、ここに沢山の社員も駐在させていた『電源開発』が植栽した広場になりますが、神川町全体が実にさくらの多い所です。

この『神川小学校』の校庭も運動場の端はさくらの古木で埋まっています。



この、運動場から一段上がった桜の木の傍に、いかにも昔からの田舎の学校と言うような物が残されています。

この辺で、『灰釜』（はいがま）と言う焼却炉？です。

石垣で囲った小さな横穴状のもので、農家ではゴミを焼くために必ず作ってあったものです。

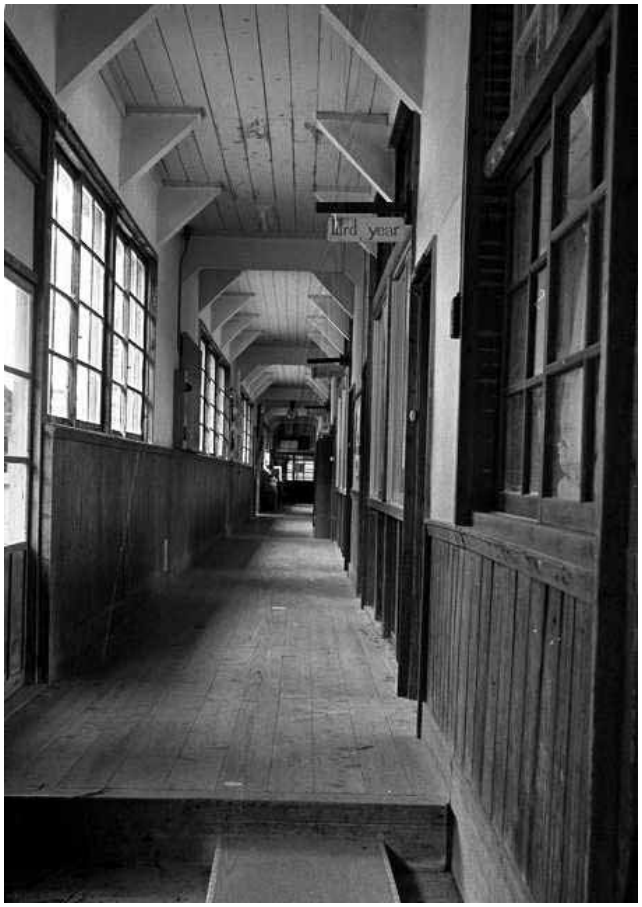
火の用心のために、家から少し離れたばしょにつくったものですから、ここでも、校舎から離れた運動場の反対側にあります。

今は、きちんとした焼却炉でも、紙を燃やすとダイオキシンが出るということで、学校でのゴミの焼却は禁止されています。こんな古い『灰釜』では紙の焼却など今は

出来ません。半分、文化遺産的なものです。
　この小学校も、熊野市内各地の小学校同様、１２０年以上の歴史のあるものです。
しかし、その歴史を大きく書き換える変化がありました。
小・中一貫教育…では無いのですが、中学と併合されました。
もう、１０数年前に入学０と言う年が出る状態まで過疎が進行していた所ですから、学校運営上からも統合して当たり前なのです。
ふつう、学校統合は、小規模校が大規模校に吸収されるとか、小規模校同士が統合するとかなのですが、熊野市の場合、昭和の合併で集まった、村ごとに一杯あった小学校は、地形上あちこちに作らないと通学が出来ないから作った物でした。村の人口が多くて、子供が多かったわけではありません。
そんな環境ですから、児童数が減少してきても、小学校同士、中学校同士の統合が難しいのです。
そこででてきたのが同じ地区の小・中学校統合です。
ただ、これによって、学校運営の合理化や、子供同士のつながりは強くなるのですが、一学年の子供が増えるわけではありませんから、教育面では余り大きな変化は無いと思います。
かといって、たとえどんなに手厚い出産・育児の手当てをしても、こうした地区では出産可能年齢の人が数えるほどしか居ませんから・・・

2008 年　04 月　07 日

熊野の旅　熊野市立神上中学校（神川）



昨日載せた神川小学校に併合され、形としては校舎が使われなくなって、廃校状態になってしまう建物『神上中学校』（こうのうえ）・神川中学校です。

この学校は、桜に囲まれた情緒のある木造校舎のものです。

講堂も校舎も老朽化は進んでいます。

しかし、生徒さえ居れば、この校舎を維持して行くほうが人間形成には良いと思われるのですが、限界集落に近づいている地区では止むを得ないでしょうね。

この中学は軟式テニスが強かった時代があります。

そうなったことも過疎と関係があるといわれたことがあります。

生徒数が激減すると、それまで幾つかあったクラブが存続できなくなります。チームを構成することも出来なくなるからです。

その点、軟式テニスのダブルスでは二人居ればチームが出来ます。４人居れば練習試合も出来ます。

と、言うことで、運動部が軟式テニス部に統合されていったと言う背景もあったのです。

しかし、小規模校でもそうした特徴があれば生徒の張り合いになったはずです。

都会からの『田舎留学』を受け入れたり、いち早くホームページを作って学校や地域を紹介したり…色々な試しみをしていましたが、過疎を止めるという物には成りませんでした。

中学校と言う物は、新制中学が出来てからの物がほとんどですから、歴史としては小学校のように長くはありませんが、半世紀を越えて思い出を作ってきた場所が朽ち

ようとしています。

　校舎の裏に残されているこの水槽は、簡易水道が出来る前、山からの引き水で生徒が手を洗い水を飲むために作られた物です。
　この時代には田舎でも水は大切な物だったのです。
　誰かがいたずらをすれば、たちまち飲めなくなります。
　さしずめ今の都会なら、『危ないから蓋をしろ』『鍵をかける』『監視カメラを置け』なんて、モンスターどもが騒ぐでしょうね。
　ほんの少しの、なんでもないことが教育だったはずなのですが・・・

2008 年　04 月　08 日

熊野の旅　熊野市立青柳分校

　この分校は『神上小学校』の分校として出来た物ですが、もう２０年も前から休校のままです。ガソリンの暫定税率みたいな物で、再開の見込みが無いのに『しばらく』お休みと言う状態です。
　『青柳』と書いて「せいりゅう」と読んでいます。

　こじんまりはしていますが、コンクリートの白亜の校舎です。
　見て分かるように、戦後立てられた新しい物です。
　この校舎が出来て、すぐに休校になりました。
　日本の役所仕事の典型のような物です。
　学校などと言う物は、都会で無い限り５年くらい前にははっきりと生徒数が読めるものです。動向であればもっと前に読めます。それなのに…

長い間休校になっていても、校庭の片隅には遊具が残っています。
この遊具も、戦後すぐの物ではなく、時代が落ち着いてからの物ですね。しかし、今ではブランコが出来る状態では無いです。遊ぶ子もいないですからね。
この分校のあるのは神川町柳谷（やなぎだに）と言う隠れ里のようなところです。
険しい山の真ん中に一寸開けた盆地状のところがあって、すごく良い所です。
今は国道１６９号線に昇格した、電源開発が作った道路まで、掘割ではないかと言うような細い谷沿いにも道路が出来ていますし、神川の中心部に向かう山越えの道もありますから、ものすごく不便と言うのではありませんが、熊野の中心部まではどちらのルートでも小一時間は掛かります。やっぱり僻地の熊野市の更に僻地ですね。
この校舎は休校以来ずっと倉庫として使われてきました。めったに使わない選挙のポスター掲示板の保管場所でした。衆議院以外は３年か４年に一度しか使いませんから、少しくらい僻地でも良いのです。
ここにも、都会から『文化人』が入ってきております。染物をする方だそうです。私も『藍染』の壷を見せてもらったことがあります。
道の駅とかでも作品は売られているようです。
興味のある方はたずねて見られたら良いかもしれません。柳谷に入ってしまえば誰に聞いても分かります。
分校の脇の道を山のほうに入り行き止まりの所です。

2008 年　04 月　09 日

熊野の旅　寄り道　田本研造　生家

熊野市から出た人で一番有名かもしれないのが、写真師・田本研造です。
函館戦争当時の榎本武揚や土方歳三などの写真を撮ったり、開拓時代の北海道の写真を沢山残した人です。
日本における写真術の先駆者として、その筋では有名な人です。
この人の写真術は、ロシア人医師に習った物だそうです。
田本研造さんは天保３年（1832）に牟婁郡神川村（現熊野市神川町）で生まれました。
最初は長崎に出て医学を学びだしたそうですが、次に赴いた函館で凍傷に罹り一命を救ってくれたロシア人医師ゼレンスキーから本格的な写真術を習ったようです。
それ以降、写真師として活動を続けたようで、北海道に関わる古い写真は彼の手による、もしくは彼の弟子たちの手によるものがほとんどだと言われています。

これが彼の生家跡です。

今は建物も無く、一部は植林までされていたのですが、近年、木も伐採され熊野市の史跡として指定されました。

写真と言う分野ですし、世の中ではあまり大変な技術ではないと思われているので、地元の熊野市でも『知る人ぞ知る』程度の人になってしまっています。

日本中の写真館のご主人の中には、この人の弟子、孫弟子と言う方が沢山居たはずです。新宮の写真館の一軒もこの人の弟子だったといわれています。

時代が時代なので、カメラマンではなく、写真師でした。

人物写真や記念写真、風景写真が主で、作品展を開くよう物では無いのは確かです。だから、写っている物や写っている人物が貴重なのであって、写真師は完全に陰に隠れてしまいます。

彼はこの家で育って、長じてここを離れてからは、大正元年（1912）に８１歳で亡くなるまで、この地に戻ることは無かったようです。

この石垣の造りはこの周辺何処にでもある形の物です。

屋敷の角っこに少し高い所を作ってあります。

私の育った家の石垣もそうでした。

まるで、見張り場所のような感じなので、良くここに上ってあちこち眺めていたものです。
おそらく、田本研造少年もここに立って、見張り気分になっていたことかと思います。
時代が時代なので、わたしの子供の頃の腰に挿した竹の棒とは違う感じでしょうが、おそらく、竹か木の棒を持っていたことだと思います。

場所は神川町の郵便局の脇を柳谷に向かって入ったすぐのところにあります。
普通の観光コースとは全く違う場所なので、他所の方が通りかかることもほとんど無いと思いますが、駐車場も整備されています。

2008年　04月　10日

熊野の旅　神川特産　那智黒石

世の中にそこだけと言うものは少ないです。
碁石の黒石として全国的に菜を売ったのが『那智黒石』です。
産出するのは熊野市神川町で、名前の通り真っ黒な石で、『黒色粘板岩』（珪質粘板岩）だそうです。
用途は碁石の黒石の他には硯や置物ですね。
神川で取れるのに、『那智黒』となったのは、一大観光地の那智山で硯に加工されて売り出されたので、そうなってしまったようです。
２０年余り前に、名前を取り返そうと熊野市側で、『熊野黒石』などと名前をつけてこちらの特産にしようとする動きもありました。いまでも、その名前も使われていますが、黒い石の代名詞化したような『那智黒石』の名前を変えることは不可能ですね。

これは、那智黒石の採掘跡です。
最大級の採掘跡の一つです。
那智黒石の鉱脈は神川ではあちこちに露出しています。
集落の中を流れる川や谷にはあちこちで見えています。
山も、那智黒石が風化して出来た小石が堆積した所もあります。
この鉱脈は高知までつながっているとか聞いたことがあります。そして、高知でも硯石が生産されていました。
他にも日本中で黒色粘板岩が採れて、硯などが作られてきました。
この石が堆積して出来る時に、その層が薄い状態で分離しながら固まったのがスレートで、厚い層になったのが那智黒石だそうです。
あちこちの那智黒石が露出して那智黒石だらけなのですが真っ黒で良質な物が採れる所は少ないのです。

　このように炭鉱のボタ山のように、細かくなったものやキメの粗い物。色の薄い物が積み上げて捨てられています。
　こうしたものの中で、色だけは良いと言う物を樹脂で固める方法が考えがられ、一見那智黒を彫って作ったような置物が作られるようになりました。
　布袋様や達磨さんなどはこの『練り物』です。
　時代の変化で、碁石・硯などは中国産に押しまくられるし、置物などの需要は減るし…この特産品も今では随分勢いがなくなりました。
　特産品があっても・・・・・・なのです。
2008 年　04 月　11 日

熊野の旅　月例　熊野市報４月号より

　今月も載せます。

　　お誕生　　6
　　おくやみ　　29　　平成２０年２月１１日から３月１０日まで

　人の動き　　平成２０年３月１日現在
　　人口　　21054　（-51）
　　男　　9800　（-38）
　　女　　11254　（-18）
　　世帯数　　10144　（-15）

　毎月ながら、空恐ろしい現実が見えてきます。
　どんどん箱物を作って、高速道路も工事中…
　無駄を絵に描くような物だと思うのですがね。

　生涯学習講座受講生募集
　　高齢者コーラス教室
　　学びの広場熊野

イタリア語会話教室
ポルトガル語会話教室
熊野市死人大学
初心者パソコン教室
子供体験教室
問い合わせ教育委員会教育課　0597-89-4111
古典文学鑑賞講座
子供読書教室
問い合わせ　熊野市立図書館　0597*89-3686
子供歴史教室
問い合わせ　熊野市歴史民族資料館　0897-89-5161

沢山用意されています。

イタリア語とポルトガル語の講座があるのは、姉妹都市のある国だからです。取り立てて、縁があるとか、日系人が一杯来て働いている工場があるとかではありません。まあ、言葉は覚えておいて損は無いでしょう。

太陽光発電システム設置補助
一件当たり　６万円　！

びっくりマークがついて載せられています。

何しろ　太陽光発電を設置する費用のうちで６万円も補助するのですから…

ゼロの自治体も多いのですから、『すごい！』のでしょうね。

チャイルドシート購入補助

半額までもしくは次に額を限度として補助金が出ます。

第１子　６０００円
第２子　８０００円
第３子以降　１００００円

まあ、まともな補助金ですが、何しろ子供が生まれませんから…

それに、こうした補助金って意外と周知されないんですよね。

新年度に入る月の市報なのでこれしきのことが一杯載っています。

何処の市報とかも同じだと思います。

市報に載せることしかPR方法も余り無いので市民の方もせっかく配ってくるのですから、広報誌をしっかり読むことが大切なのでしょうね。

スピーカーで毎日放送する方は、『税金の期限です…！』みたいなのがほとんどですが、紙のほうには少しまともなのが載っていたりします。

Tags:熊野市　by **je2luz** | 2008-04-11 12:11

2008 年　04 月　12 日

熊野の旅　電源道路　国道 169 号線

熊野市の山間部、七色ダムの湖岸を走っているのは、国道 169 号線です。

垂直に切り取ったノリ面を持つ、落石常襲道路です。

およそ、国道らしくない…それも、100 番台の国道には似つかわしくない物です。

それもそのはず、20 年ほど前に突然 169 号線が引っ越して、この道が国道になってしまったのです。

理由は、『県道では改修予算が付かない』と言うものです。

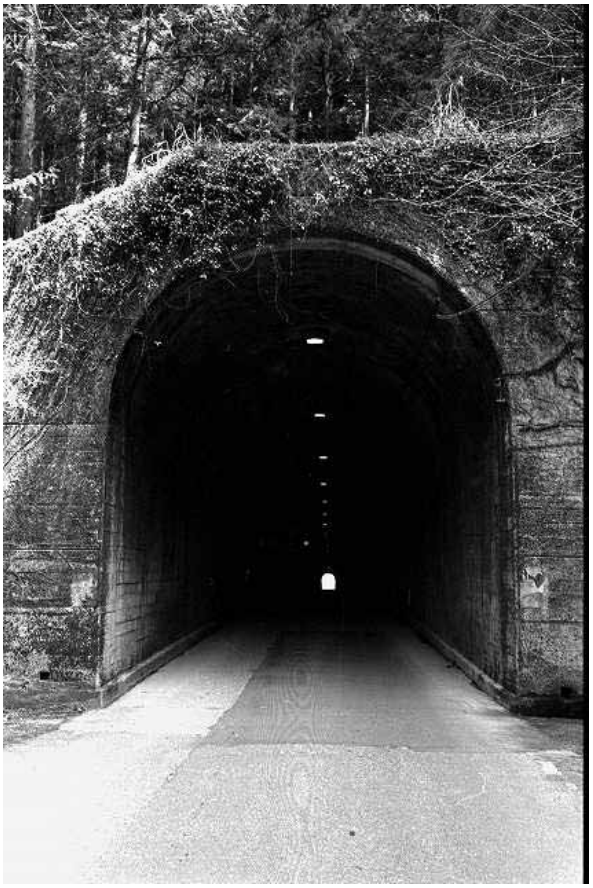
さらに、元々、橿原・奈良方面からの国道に 169 号と 309 号があり、上北山村からはずっと同じ路線を使う併用区間だったので分離できると言うこともあったのです。

さらにさらに…和歌山県飛び地の東牟婁郡北山村や奈良県側にとっては、『どうせ分離するなら 300 番台より 100 番台の方が優先順位が上になる…』と、言う思惑もあって 169 号線の方が分離されて、遠回りの山めぐりコースになってしまったのです。

いまでも、奈良方面から熊野方面に向かうルートを国道 169 号線と言いますが、この変更からは、橿原で国道 169 号線に乗っても熊野市五郷町に入ったところからは、その 169 号と分かれて 309 号線で熊野に向かうのです。

分岐点の五郷町桃埼の三叉路では自然に走ると直進で 309 号を走ります。優先順位の高いはずの本道の国道 169 号線の方が併用を外れて直角に分かれて行きます。

こんな所にも、政治的思惑と言うものがでています。



この、幅の割りに高さのある少し変わったトンネルはこの 169 号線が別れてすぐにあるものです。

もちろん一車線です。真ん中に退避場があり大型同士で無ければ対向できるようにはしてありますが、地元の車は対向車があれば進入しないで待機します。
こんな形のトンネルは古くからの国道でもありません。特殊な形なのです。
それと言うのも、この道路は『電源道路』なのです。
昭和30年代に推し進められた『熊野川総合開発』のダム作りのために電源開発が作った道です。
鉄道のある海岸線の『大泊』から『七色ダム』『七色発電所』に資材を運ぶための道です。
建設資材は細かく出来る物が多いのですが、発電所に搬入する発電機の部品のローターなどは分解できないので大きくなってしまいます。
国道ではないので、なるべくコストを低くしてぎりぎり通る設計にしたのでこんな変形した物になったようです。

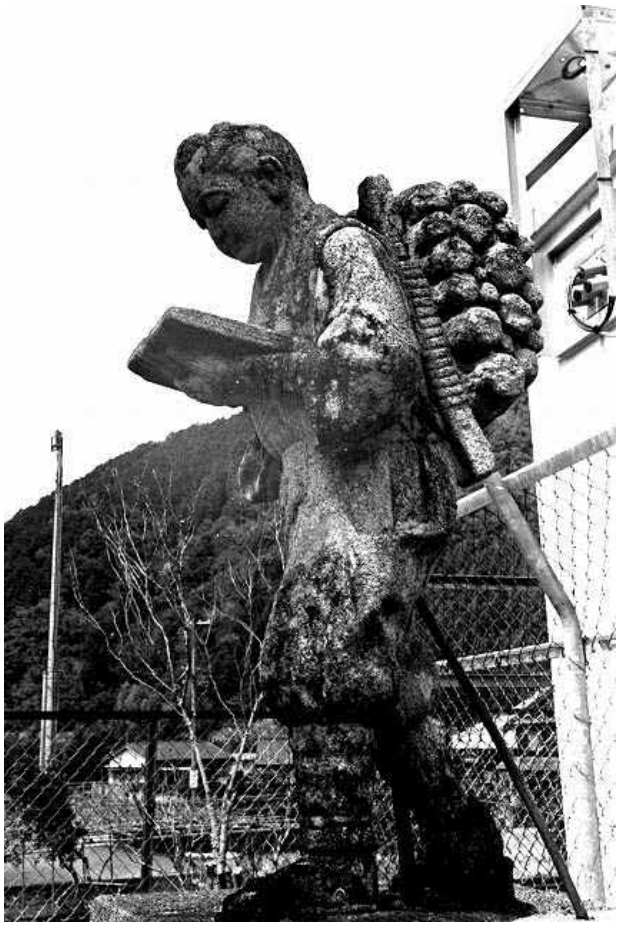
国道にしてメリットがあったかって？
少なくとも、和歌山県北山村にはあったようです。
ダムサイトを離れてから、北山村に向かう区間では、突然二車線の新規格の国道が現れますから…

Tags:熊野市 国道169号 モノクロ　　by **je2luz** | 2008-04-12 12:37

2008年　04月　13日

熊野の旅　熊野市立五郷小学校

熊野市の山間部、国道169号線沿いに広がるのが、旧五郷村です。
大又川に沿って集落が点在しますが、同じ川沿いの旧飛鳥村に比べると、少し下流になるので空が広くなった感じです。
普通の川は、上流より下流による方が海に近くなるのです。
しかし、大又川は最上流の大又を出てから、すぐ下流の小阪までは海に向かって流れているのですが、行く手を硬い花崗岩の岩盤で出来た山にさえぎられ、山の間を出口を求めてさまようことに成ります。
どんどんと山の中に入っていって大台ケ原から流れ出る北山川と合流して、又々さまようように紀伊山地の中を流れて、果ては、十津川と出合い、『熊野川』と言う大河になって、やっと、まっすぐ海に向かいます。
ここ五郷はそんな関係で上流の飛鳥より海から遠くなり、海抜は低いのに冬の夜の冷え込みが厳しくなります。
中心部の木本からもうんと遠くなって、田舎と言う感じが強くなってしまう所です。
遠かった分でしょうか、ここには内科の開業医も歯医者も昔はありました。



そんな五郷村が作った小学校が『五郷小学校』です。
隣りの飛鳥村に比べ、村域が狭かったので事実上一村 1 校の小学校でした。
昔の名残を残しているのが、この『二宮金次郎像』です。
校門の脇で今も本を読みながら歩いています。
銅像で無かったので戦時中の供出から逃れられたのでしょうか・・・

今は生徒数も減少していますが、昔は校庭一杯に子供が遊んでいた物です。
校舎の右手に見える『講堂』もかなり古いものです。
以前に、建て替えの要望も出ましたが実現はしませんでした。

当時にも保存すべきだと言う声もあった、少しモダンな外装の講堂です。
今流に言う、『屋内運動場』としては基準に全く満たない物ではありますが、味気の無い今式の体育館では思い出に残らないでしょうが、この講堂はここの卒業生の思い出になっているものと思います。

Tags:熊野市 国道 169 号 モノクロ by **je2luz** | 2008-04-13 11:54